



今回持ち込まれたEV車両のベースは、1986年発売のヤマハ「YSR50」。指導をされた橋本憲介先生(中央)が「若い頃、ミニバイクレースで実際に使っていたもの」だそうです。この車両にはかつての卒業生たちによって美しい漆塗装が施されており、「先輩たちが苦労して塗った車体に傷をつけてはいけないという緊張感もあった」そうです

モノ創りでつながる技術者とその卵たち 高校生が「自作EV」とともに当社を訪問

ご覧ください、この弾けるような笑顔。第43回東京モーターショーに出展したEV(電動)スポーツバイクの試作車「PES1」(左)を囲み、充実感いっぱいの表情を見せているのは大阪府立佐野工科高校の生徒さんとその先生(前列)です。3月下旬、同校の生徒による自作EV二輪(右)を車に積み込んで、はるばる静岡県の当社を訪ねて来てくださいました。

この車両は、研究課題「水素化マグネシウム燃料電池アプリケーションの研究」の一環として、同校の機械系3年生や機械工作部が中心となって企画・設計・開発に取り組んできたもの。その車両を「EV二輪開発のプロに見てもらいたい」と二輪専門誌を通じて当社に打診があり、この対面が実現したわけです。

「もともと私たちの事業部には、若い人たちと積極的に交流をしていこう、若い可能性をどんどん伸ばしていこうという機運があるのです」と話すのは、当社SPV*事業部第2開発部の小屋孝男さん(後列右から2人目)。「ですから迎える方としてもできる限りの対応をさせていただこうと、事業部長を筆頭に、モーターをはじめ制御や車体など各専門領域の技術者に声をかけ、さらに我われが研究開発中の『PES-1』も見てもらおうということになりました」。

高校生たちが持ち込んだ車両には、技術的にも非常に高度でかつオリジナリティの高いチャレンジがいくつも盛り込まれ

ていました。その代表的な例として挙げられるのが、前輪に内蔵したハブダイナモの採用や片持ちスイングアームの製作です。懇談会に出席した技術者たちも「(開発費の制限など)失敗できない環境の中でよく完成車までまとめた」「工作機械だって十分とは言えなかったでしょう?」と感心した様子を見せ、その後開かれた試乗会でも「走りがスムーズ。制御の技術もかなりのレベル」という高い評価の声があがりました。

「もともとは、未来の技術者たちに先輩としてなんらかの刺激を与えたいという気持ちで迎えたのですが、実際は私たちの方が大きな刺激を受けることになりました」と小屋さん。「限られた環境の中でこれだけのチャレンジをしている若い人たちがいるのだから、我われも負けるわけにはいかないと。一方で、普通は社会に出てからやっと体験できるようなチャレンジを、高校生という多感な時期に経験した彼らをうらやましくも感じました」。

さて、冒頭の記念撮影のシーン。「『PES1』に手を置いてください」とリクエストすると、「いや、無理です。触れません」と生徒さん。まるで憧れのスターと写真に収まるようなごちなさでそっと手を添えるその様子を見て、「モノ創りは楽しい。でも必ずその上がある。それを理解して、次はその上をめざして新たなチャレンジをする。これが技術者魂です」小屋さん。最後は先輩エンジニアとして「どうだ!」という笑顔を見せたのでした。

※ SPV = スマートパワー ビークルの略。